

# Paris

天井からはひときわ目を引く大風が吊るされた



## 研究員レポート

## Part 2 パリ見聞記

研究員 脇田 弘樹

### ◇「イリア エクスポジション」

ドゥ ジャポン」

欧州最大規模のインテリアとデザイン  
の国際見本市「メゾン エオプジェ」を視  
察した翌日は、地元で日本を紹介するフ  
リーペーパーを発行するJIPANGOとい  
う組織の協力を得て、この視察に参加し  
ている六つの団体の展示会を開催した。  
小規模ながら、商品の説明や実演を通し  
て現地の反応を直に見ることのできる貴  
重な機会である。

会場は、2000年に世界中で大ヒッ  
トした映画「アメリカ」で主人公が水切りを  
していたサン・マルタン運河のほとりに  
あった。運河は現在もその機能を残し、水  
門を閉鎖して貨物船や観光船を上流へと  
運ぶ光景は日常のものとなっている。

この日は日曜とあって、運河のほとり  
にはコーヒーを飲んだり、読書をしたり  
と思いきいの時間を過ごす人たちが途切  
れることなく訪れていた。

会場となったCentre Cultural Pouya  
というカフェの地下室は、ごく小規模な  
ギャラリーに使われるほどの広さしかな  
く、エアコンがない。余談だが我々が滞在  
したホテルにもクーラーというものはな  
かった。9月初旬のこの時期、日本であれ  
ば考えがたいことであるが、そこはパリ  
である。ホテルでは少し窓を開けるだけ

で十分涼むことができ、滞在中に食事を  
したレストランやカフェでもクーラーが  
あるところというのは稀であった。多く  
の場合、この街ではクーラーというもの  
は必要ではないらしい。

しかし、この日、この地下室は違った。  
設計者の想定を範囲を超える人が流れ込  
んだせいか、開場後、その熱気ですぐに室  
内は蒸しかえるよ  
うな暑さに襲われ  
た、らしい。らしい、

というのも我々（兵  
頭、脇田）はその頃、  
集客に一役買おう  
と、運河のほとりに  
出て見本市開催を  
告知したチラシを  
配っていたのであ  
る。緑色に染め抜い  
た五十崎町商工会  
の法被を羽織り、通  
訳さんに教えても

らった「ボンジュール イリア エクス  
ポジション ドゥ ジャポン（こんにち  
は 日本の展示会を開催しています）」と  
いう片言のフランス語を頼りにチラシを  
渡す東洋人。このサン・マルタン運河に  
とつておよそ非日常的な光景が道行くフ  
ランス人にどう映ったかはわからないが、  
意外にも多くの人は好意的に受け取って



サン・マルタン運河のほとりで  
チラシ配りに精を出す兵頭研究員

現地バイヤーとの交流会。  
五十崎和紙を見せて意見を聞く



くれたし、そうでなくてもほとんどの人は「ボンジュール」くらいは言い返してくれた。

さて会場はというと、そんな怪しげな呼び込みの効果も少しはあったかもしれないが、あらかじめJIPANGOからのDMを受けた人たちと合わせて「日本」に興味ある人たちがひっきりなしに訪れていた。

フランスでは、最近、特にMANGA、SUSHIなどをはじめとした日本の文化や風習に興味を示す人が多くなっているという。事実、こちらが「ボンジュール」と声をかければ「コンニチワ」と返してくるフランス人は一人や二人ではなかった。なかには流暢な日本語で質問してくる人もいるから驚きだ。五十崎町商工会のみなさんは、展示品の説明やアンケートの協力依頼から、用意した菓子や日本酒を勧めたり、時には一部展示品を販売するなど、暑さで滴り落ちる汗もよそに、昼食もまもとれなほほど終日対応に追われた。

すべての片付けが終わってCentre Culturel Pouyaを後にした午後8時過ぎ、パリはまだ明るい。通訳の方によれば

「それでも少し前までは10時11時くらいまでは日があつたから、今、パリの人は『そろそろ夏も終わる』とどこか寂しさを感じているんですよ」とのこと。環境が変われば感覚も変わるものである。我々も秋の夜長ならぬパリの日長を楽しみながら夕食をとった。

### ◇パリの夕暮れに

翌日、JIPANGOの方からフランスのマーケットについてのレクチャーを受け、その後パリ市内の日本商品を扱うショップを視察したところで、今回のパリ視察の主な内容は終了した。この3日間、ほとんど息つく間もないほど過密なスケジュールをこなしての市場調査であった。五十崎町商工会のみなさんと、この日、シャンゼリーゼ通りで夕食をとむにして、凱旋門の前で別れた。この時、凱旋門をバックにして撮った写真が、この集団の不思議な縁を象徴している。

凱旋門に登った。夕暮れ、眼下にパリの街が広がる。わずかな期間であったが、はじめに訪れたこの街では市場調査以外にも、経験したあらゆることが新鮮だった。ごく日常的な地下鉄に乗ることからはじまり、食事をする、ホテルを探すことなど日本だと当たり前のこともそうではなく、またその逆もある。何度かはつとずる瞬間があつた。今回そのほとんどをこ

こに書ききれないが、パリが私にとってもう一度行つてみたいと思う街になったことは間違いなさそうである。

ちなみに凱旋門をあとにした我々は、その螺旋階段の昇降で失った水分を取り戻すべくカフェに直行したが、五十崎町商工会のみなさんはホテルへ戻り、早速この3日間の総括をしたというから、その姿勢にはただただ頭が下がる。

久保会長以下五十崎町商工会のみなさま、(株)地域振興総合研究所の長岡さん、洪川さん、所長さん、大変お世話になりました。



凱旋門前で事業の成功を誓って (撮影=脇田)